

住みやすい まちづくり

「あたたかさを感じる」
支援／ホームレス支援
活動を通して

福岡県・社会福祉法人 慈愛会
養護老人ホーム 篠原の里
施設長 田中 英樹

法人概要、活動内容

法人概要	<p>法人設立年 昭和46(1971)年 経営施設数：5施設</p> <p>種類ごとの経営施設・事業： (第一種社会福祉事業) 児童養護施設：1 障害児入所支援事業：1 乳児院：1 特別養護老人ホーム：1 養護老人ホーム：1 (第二種社会福祉事業) 障害福祉サービス事業 老人デイサービス事業(高齢者生活支援ハウス) 老人短期入所事業 認知症対応型老人共同生活援助事業(グループホーム) 老人居宅介護等事業 小規模多機能型居宅介護事業 特定相談支援事業 障害児相談支援事業 障害児通所支援事業 (公益事業) 居宅介護支援事業 介護保険法に基づく第一号事業 生活支援サービス事業 地域包括支援センターの運営</p>
法人実施事業	<p>キーワード 「まず実践」「協働」「共助」</p> <p>開始年月 平成25(2013)年2月</p> <p>対象者 路上生活者など</p> <p>担い手 施設利用者・法人職員・実習生・個人ボランティア(福祉関係者、大学生、行政区など)</p> <p>頻度・時間 毎月1回：調理2時間、提供(移動時間含め)2時間半程度</p>

はじめに

社会福祉法人 慈愛会は、法人理念(表)の周知実践として、「高い理想と向上心をもち、法人理念を実践することで、社会福祉法人としての使命を果たす」ことを掲げ、そのなかで地域における公益的な活動に日々取り組んでいます。

養護老人ホーム 篠原の里(以下、篠原の里)では、見守り清掃活動や生活困窮者就労訓練事業など、複数

法人の基本理念

私たち一人ひとりは、愛される者として存在している。
私たちは、利用者一人ひとりを大切な独自の存在として尊重しなければならない。
それは、利用者にかかる職員が、先ず心を開いて自分をあるがままに受け入れ、生命を与えられたことに感謝し、同時にお互いをひとりの大切な人として認め合うことから始まる。
私たちは、ひとりの人から、ひとりの人へという触れ合いを、何よりも大切にしたい。

創始者 平田 清正

の地域貢献活動を実践しています。
今回は、篠原の里の地域貢献活動のなかの一つである、ホームレス支援活動について紹介します。

わたしたちができること

ホームレス支援活動を行うようになったきっかけは、篠原の里で2人めとなる矯正施設(刑務所、少年院など)出所者の福祉的支援を行ったことに始まります。この利用者はホームレスを経験したことがあり「集団生活よりもホームレス生活がよい」と無断外出や外泊を繰り返しました。安否確認のため、その都度捜索活動を行っていたなかで、ホームレスの方がたと知り合い、利用者の捜索を手伝っていただきました。特に「食」に課題を感じました。その後、法人および施設内で捜索のお礼として私たちができることを検討した結果、「食事の提供」「健康相談」

をホームレスの方がたが生活されている公園で行うこととなりました。

活動を始めるにあたって

活動にあたり、調理や資金調達、ボランティア(提供者)、提供場所などさまざまな課題がありました。結果として施設で調理を行ったものをパッキングして公園に持参し、提供することとなりました。その際にペットボトルのお茶や冬季のカイロ、活動のチラシもあわせて配布することにしました。

また、資金については、篠原の里の利用者の楽しみ活動として作成している「マスコット」をバザーで販売したり、門松を作成して近隣の施設へ設置した売り上げを充当、ボランティア(提供者)として法人職員と篠原の里の利用者が参加するなどをして工夫しています。

現在の活動で大切にしていること

平成25年2月から毎月1回、現在

■写真1 食事提供の様子



地域のさまざまなつながりを感じながら行っているこの活動で、特に重要視していることが3点あります。1点めはホームレスの方がたの体調を含めた相談への対応です。バイタルチェックは看護師により実施し

てもらっています。

結果を行ったことがきっかけで、政区長にも活動に参加していただきました。その後シニアクラブの会合などでも活動の紹介をさせていただけ、手作り工芸品などをバザーへ提供をしていただいております。そのほか、活動について地域の方の口コミで少しずつ広がり、研修に来られる法人や業種を超えて個人で活動に参加される方もみられるようになります。

『あたたかさ』を大切に

「あたたかさ」を大切に

ます和たぢもいまたはそこの検言
が不十分であり、もどかしさを感じ
ているところです。

「住居」や「清潔保持」の確保も歴史的課題です。厳しい暑さや寒さをしのぐためには住居が必要で、感染症予防のために清潔保持、つまり入浴などが必要です。しかしながらかそれらの確保ができるおらず、健康状態に不安な方も多くみられていています。ムニラ・ミニニニの食付

す。活動を始めて4年が経ちました
が、私たちはホームレスの方がたが
食事提供を通じて「あたたかさを感じ
る」支援を継続していきたいと考
えています。そのためにはもつとコ
ミュニケーションをとることが必要
で、その手段として生活困窮者自立
支援制度や生活保護制度を中心とし
た制度の理解や把握、そして何より
もソーシャルワークの視点が重要と
なります。

87

一人ひとりが抱えている問題や課題、あるいは自身の障害などが垣間みられ、それによって生活が困窮されている様子がうかがえます。

これらは社会福祉法人として考えていくべき重要なニーズだと思いますが、対応にあたってはさまざまな公的機関や民間の社会資源などとの連携が必要と感じています。つまり、同じ形態の施設だけではなく、さまざまな分野（障害、高齢者）の関係機関・団体、事業所、行政などを含めた地域連携による総合支援が重要となると考えます。

常に小さな活動ですが、自立支援を念頭に、ボランティアの皆様の協力をいただき、ホームレスの方がたの一助となればという思いを込めて、今後も継続していきたいと思います。

ていますが、身の上相談については
相談に対応する知識や経験不足を補
うため、福岡県社会福祉士会が行つ
ている「巡回ふくおか」に協力いた
だいているところです。また、お茶
を提供する際に「困ったときの連絡
先」などのチラシを毎回配布するよ
うにしています（写真2）。

2点めは、篠原の里の利用者と共
に実施しているところです。この活
動の流れとして「マスコット作り」
「バザーでの販売」「苗植えおよび
畑作り・収穫」「調理」「公園へ持參
が、どの過程も利用者と職員がいつ
しょに携わり、協働できるように考
えました。

社会性が失われてしまうこともあります。そこで、それぞれ自分の体調や特性、興味に合わせた活動に参加することで、体を動かしたり、調理手順を考えたり、外部と接する機会が増えたりと社会性にもつながってきます。つまりこの手順

のやりとり」は、素晴らしいものが
あります。

3点めは職員のボランティア活動として位置づけていることが挙げられます。我われは施設においてボランティアの受け入れの機会が多くあります。が、自分たちが地域などで積極的にボランティアを行う、実践するという感覚は乏しいようを感じます。この感覚を磨くことが、職員自身のレベルアップとなり、地域との連携を考えていくうえで、課題やニーズの発見などにつながります。そして「地域における公益的な取組」へと発展できる要素となると感じています。

